

被災地から

九州豪雨3年

下

脱炭素 防災の 一歩

復興計画に

太陽光パネルが並び、いくつもの蓄電池が設置されている。熊本県球磨村で、増えつつある光景だ。

村森林組合の製材加工場もその一つ。蓄電池やパネルは木材を乾燥させるボイラーの電力として使い、運転に使う電力量の40%を賄う。扱っているのは球磨村森林電力(球磨電)。2018年にできた会社だが、村で脱炭素の取り組みを広める役割を果たしている。

村は20年7月の九州豪雨を機に温暖化対策に、より力を注ぐ。あの日、村を横断する球磨川が氾濫し、25人の命を奪い、3割にあたる約450世帯の家屋に大きな被害が出た。復興計画として盛り込んだのが「脱炭素のむらづくり」だ

った。

気候変動による災害が頻発する中、温暖化の原因とされる二酸化炭素(CO₂)を削減。公共施設など6か所に蓄電池などを設置し、家庭用や事業所用などの電力需要の8%を賄う。今後は27年度までに80%に伸ばし、30年度までにCO₂排出量実質ゼロを目指す。

松谷浩一村長は「被災地だからこそ、温暖化に向き合う意味がある」と強調。球磨電の代表中嶋崇史さん(38)は「災害をきっかけに、関心の高まりを感じる。脱炭素を通じて、林業の競争力強化や荒廃農地の再生、暮らしやすさの向上などにつながりたなら」と取り組みの広がりに期待する。

取り組み広がる

相次ぐ河川の氾濫は、豪雨発生の増加が背景だ。温

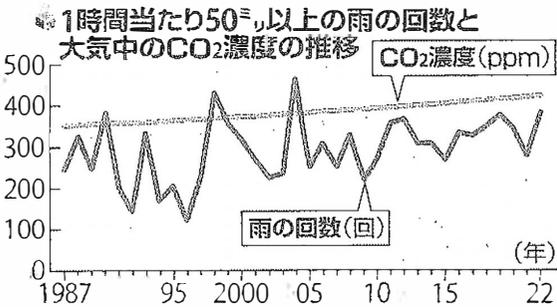
球磨村 太陽光導入進む

製材加工場の蓄電池について説明する球磨電代表の中嶋さん。温暖化対策にもつながっている(6月19日、熊本県球磨村で)



暖化が要因とされ、国連の「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」が今年3月にまとめた報告書では、CO₂の排出量削減などについて「今後10年間の選択と行動が数千年にわたる影響を与える」と警告している。

熊本県では、球磨川流域の6市町村を含む計26市町



大雨増 温暖化影響か

気象庁によると、大雨の発生回数は年々増えている。強い雨ほど増加率が大きく、温暖化が影響している可能性があるという。

1時間当たり50ミリ以上80ミリ未満の「非常に激しい雨」や80ミリ以上の「猛烈な雨」の発生件数は、2013～22年では年平均328回。統計を取り始めた1976～85年(平均226回)と比べると1.5倍で、100ミリ以上では2倍となる。

二酸化炭素などの濃度が高まって気温が上がると、空気がより多くの水蒸気を含むようになる。その結果、大量の雨を降らすという。国立環境研究所の分析によると、特に九州西部では、梅雨前線に流れ込む水蒸気が九州山地にぶつかり、雨を降らせる例が多い。

村が「ゼロカーボンシティ」を宣言し、50年までにCO₂の排出量実質ゼロを目標とする。19年の台風19号で停電した群馬県上野村は盛んな林業を生かし、端材を使った木質バイオマスなど再生エネルギー利用を行う。電気地産地消を進め、災害時に備える。

球磨村住民の意識は変わってきた。小中学校で昨年7月、電動スクールの運行が実験的に始まった。球磨中3年の多方佑弥さん(14)は「豪雨を経験し、温

暖化を肌で感じた。電気をこまめに消すなどできることからやっつけていく」と語る。21年に太陽光パネルを設置した「こがね保育園」は、約60%の電力を賄える。九州豪雨で停電が続き、再開に約2週間かかったために設置した。電気料金が約2割下がったという。「子どもを預かる施設として電力確保の重要性を痛感した」。中井久美園長(62)はそう語る。被災地だからこそ、できることから始めなくてはいけない。(山之内大空、坂田元司)

変わる意識